IRIA2026 出張レポート

渋谷 圭（群馬大学医学部附属病院）

はじめに

2026 年 1 月にインド、ハイデラバードで開催された IRIA2026（Indian Radiological and Imaging Association）に参加する機会をいただいた。本学会はインド国内外から多数の放射線科医が集う熱気あふれる学会であり、日本医学放射線学会（JRS）のご支援により、貴重な国際交流の場を得られたことに深く感謝申し上げる。

学会について

今回は、京都府立医科大学の山田恵先生とご一緒させていただいた。いつもながらの山田先生による素晴らしいご講演に続き、筆者は「Interventional Radiology for Non-Traumatic Emergencies」というタイトルでお話させていただいた。参加者の 9 割がインドの放射線科医であったが、北米や欧州からの参加者も多く見られた。日本の JRC とは異なり、放射線治療（Radiation Oncology）のセッションはなく、完全に分離しているようである。参加者は非常にフレンドリーで、日本人医師という珍しさもあったかもしれないが、至る所で声をかけられた。国際交流という観点からは少なくとも筆者にとっては大変有意義な機会であった。

私の専門である IVR についてであるが、インドにおいては非常に人気の高い分野とのことである。その背景には、一般の放射線科医よりも高収入が得られるという現実的な側面もあるようだが、若手医師たちの意欲は非常に高い。いくつかの Cancer Center の医師と交流する機会があったが、アブレーション一つとってもクライオから IRE（irreversible electroporation）に至るまで、多くの症例で多彩な手技がアグレッシブに行われている実態に驚かされた。疾患にもよるが、外来や病棟管理も IVR 医が主体となって行われているようである。大血管や末梢血管領域においては日本に一日の長があると感じたものの、その他の領域においては学ぶべき点も多いと思われた。

学会主催の懇親会やツアーでは、インドの伝統的な文化とホスピタリティに触れることができた。色々な意味で「非常にインド的」かつスパイシーであり、その刺激とともにインドのダイナミズムを肌で感じる貴重な経験となった。

おわりに

今回の学会参加にあたり、多大なるご支援をいただいた JRS 事務局の皆様、ならびに関係者の皆様に心より深謝申し上げます。